

ちょっと長くて くどい編集後記

学会スタート以前

二〇〇九年秋に発足した学会ですが、その前、二年余り、京都キャンパスプラザで月例の「対人援助学会準備会」を開催していました。ここには毎月、ヒューマンサービス分野のいろいろな人にゲストスピーカーとして来ていただきました。そこで見てきた地域社会のディテールの構築性をとても興味深く思っていました。マガジンでは、そこを更に掘り下げたものが生まれると良いと思っています。月例会も又、再会したいと準備中です。お楽しみに。

創刊

会員112名(2010/5/25現在)の小学会ではありますが、技術革新の恩恵を受けて、こんな形の雑誌が出せることになりました。まず連載を引き受けて下さり、締め切り日に原稿がいただけた執筆者の方々に感謝します。

ご覧の通り、様々なジャンルからの多彩(多才)な顔ぶれによる一冊に仕上がりました。まだまだ展開途上(完成形は全く考えていないので、ずっと展開途上誌です)ですので、学会員のみならず、読んでくださった方々から、幅広く感想やご意見を伺いたいと思っています。

編集長メールアドレス

danufufu@osk.3web.ne.jp

また、新規連載参入の意思表示もお受けしたいと思います。編集者として採否判断はさせていただきますが、多領域から広く捉えた「対人援助学」の花が咲き乱れるといいと思っています。

季刊誌の位置づけです。創刊第二号は三ヶ月後、9月中旬発行予定です。したがって8月末が原稿締め切りになります。連載を開始された方々、心に留めておいてください。

マガジンへ

思いつきは瞬間でした。ニューズレター編集担当の千葉君と話している最中、最初に考えていた印刷物のNLから大きく展開してしまいました。そのことで負担は増えましたが、楽しみも増えました。この着想から考えはじめたら、話題のFreeのことや、iPadがとてもしっくり来ました。

80頁程の雑誌だというのに、総ページ数も印刷費も発送コストも考えなくていいのです。バックナンバーの在庫管理も、売れ行きも、収支決算も要らない刊行物になりました。表紙のデザインや基本レイアウトのことを、あれこれ楽しみに考えていただけでした。校正が緩いかもしれないのはお許し下さい。まあ、素人ですから。

「学会誌」(本マガジンとは別です)を完全にWEB上の発行にしようと言っていた望月さん、サトウさんの意図がやっと理解できました。

ところで、世の中は、ますます短く、簡潔なものへの指向を強くしています。私の愛読誌「月刊クーリエ JAPON」も何度かのリニューアルを繰り返して、どんどん記事は短いコラム誌のように変身しています。

そんな中だからこそ、長く書かなければ伝わらないこともあるのだというマガジンにしたいと思いました。専門的ではあるが、読者対象に排除的姿勢をとらない。どなたにも「今、この世界では！」とお伝えできるもの満載になったのではないかと考えています。

雑誌(印刷物)として手にするのが馴染む方は、ご自身でプリントアウトして、ファイルしていただいただけだと、雑誌らしさが出るかもしれません。(その場合、出来ればカラー印刷で)。

今後の課題は、会員を増やすための宣材として考えていたニューズレターの役割問題です。無料で誰でも読めるマガジンにしたら、入会するメリットがないという意見。私も長年そう思ってきましたが、ネット上の無料ソフト開発者のモチベーションの在り方のことを考えると、この思い込みはオールド世代のビジネスモデル発想かなと思うようになりました。新しい学会を作った目

的に見合う活動は何なのか。そこに向けてどう行動すべきなのかが問われています。

執筆者

雑誌の基本コンセプトが出来ると私の回りで、様々な対人援助世界で活動する人に、執筆を呼びかけてみたくなりました。

「出来るだけ自由に、何でもいから書いてください。ただし連載です。最低でも一年、できればそれ以上延々と。季刊発行ですので、年4回。最低でも2頁、出来ればもっと長く」、こう書きました。

長く書いて下さいということは、その方の世界の一部がある程度の深さをもって提供されることを求めています。業界の専門用語や慣用概念で解説をして終了なんて原稿は登場する余地の少ないことになりました。

この要望に応えるものを書くためには、それなりのキャリアも必要かもしれません。でも、年配の人にしか書けないというものでもありません。いろんな年代の、いろんなジャンルの経験智が集まるといいと思っていました。

また、一分野から一本というコントロールをかけるのではなく、似通った実践が出てくるのも容認しようと思っています。細部に神宿るといいます。そんなディテールの差異こそが私たちが見るべき物なのかもしれません。

もっとも冗長がすぎれば読み手はうんざりして離れてしまうだろう事も戒めに、筆者、編集者共に、この営みを開始します。(編集長 団士郎)

理事会で、対人援助学会のニューズレターを担当することになった。あれこれ編集長と話しているなか、「ニューズレターではなくて、マガジンにしよう！論文や授業で、よく出てくるような話ではないものが出てきたら、おもしろいやる。」それは、確かに、オ・モ・ロ・イ。

「マガジン」という言葉も、なんだか懐かしいやら、新しいやら。マンガ世代の私には、マガジンというと、まず少年マガジン、テレビマガジン！昔わくわくして書店へ発売日に駆け込んだ思い出とともに、陽性の感情を伴う。

四十代で復活し、楽しみまくっているバンド、ユニコーンの復活後に出た書籍もそのあたりの「マガジン」をカメオにしていた。そして、プラモデル世代の私には、マガジンというと別の意味を思い出す。マガジンというと銃の弾倉だ。映画などでよく観る、銃器類の弾切れでガチャッと外して新しいのとガチャッと取り替える、アレだ。

編集会議の中盤、著者の方々の連載第1回原稿を手にする。データ刷りだして100ページ弱の厚みや重さ、面白そうなタイトル、対人援助業界のみならず、社会への火薬的な役割は、まさに「マガジン」なのだ。

編集長の仕事場で複数回、延べ10時間以上にわたる編集会議。(もちろん皆さんのご想像通り、たくさん脇道にもそれて、アレヤラ・コレヤラ会議！)。初回は、理事の川原氏、乾氏、会員の多田氏のご協力をいただきスタート。

数回目、原稿データを持ち帰って作業開始！微力ながら、ページのデザインを十種あまり作って検討。そのうちの一つのデザインに絞って、組みなおす作業を担当。また、ネット上での著作権侵害に関することに関して、弁護士の方に教えてもらったり、ネットによくある「何でも質問箱」も初めて利用して、調べてみたり。

その一方で、原稿を読み進めていったのだが、クオリティの高さに打ちのめされる。いずれも対人援助の現場が内包してきたものでありながら、社会に表現できていなかった部分であり、欠かせないポイントとなることが含まれているように感じる。

これを人々に届けるということは、是非やりたいことだ。というか早速、私が伝えられるところでは、既に告知済み。「電気自動車 日産リーフ 月×日 発売！ 先行予約受付 開始！」という感じ。一つ一つの内容は、それぞれについて考えたいことであり、知っておきたいことであり、取り上げたいテーマである。

うちの業界は、そうみられているのか?!
その業界の人の自己評価はそんな感じだったのか! そんなことがあるのか...、早く続きが読みたい! 時には、その立場の人に、そうは言われたくない!なんて思いも浮かぶ。

様々な思いで読み手を射抜き、頭と心に火薬的ともいうべきスピードで何かを動かす。そんなふうに、いろんな意味でのマガジンなのだ。

連載の二手目に著者の方々は何かを持ってくるのか、新連載はあるのか? 子どもの頃、マガジンの発売日に百円玉と十円玉を握り締めて近所の書店に駆け込んでいた。次号を待って、やっと手にできるそんな気分を久しぶりに思い出させてくれる、対人援助学マガジンに乞うご期待。(編集員 千葉晃央)

表紙の言葉

表紙は毎号、変えようと思っています。登場するのは、一度はどこかで役目を果たした作品になる予定です。創刊号の表紙は、連載執筆者の一人である岡田隆介著「家族援助のレシピ」金剛出版の裏表紙に使用したものです。

装画を依頼された時、すぐに「家族援助のレシピ」の言語連想で思いついた登場人物(コック)。あの帽子は記号としてとても効果的です。TV番組「ビストロ SMAP」が話題になっていたこともあって、表紙は数人のコックを描きました。

これは裏表紙でしたので、バーコードが入った縮小されたものを購入者には見ていただくことになりました。今回はそのままに近いものです。タイトルや書名は、入ることを前提に描いているので違和感ないのですが、バーコードには異物感がぬぐえません。かつて、イラストレーターの和田誠さんが装丁したある本では、購入者が後から剥がせるように、貼り付けシールのバーコードにしてありました。

対人援助学マガジン

No. 1

2010年6月15日発行

<http://humanservices.jp/>

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通 2-4-1

リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

学会入会規定

入会資格は特にありません。対人援助学会に関心のある方ならどなたでも会員になれます。

会員の特典は、電子媒体の学会誌や年次大会のプログラム、その他本会の発行する資料の配布を受ける。

年次大会および学会誌上での参加・発表資格、ならびに対人援助学マガジンの執筆資格を有する。

入会年度は、毎年9月1日より新年度になります。

詳しくは学会ホームページをご覧ください。